

G. 血液・骨髄・脾・網内系

(93-99)

本セッションは造血器という比較的特殊な臓器で、しかも学会最終セッションであったが、会場はほぼ満員で活発な討議が行なわれた。まず、93, 97 席で ^{111}In 標識顆粒球の炎症巣の描出と好中球回転への応用について発表された。93 席では動物で ^{111}In -oxine 標識好中球は ^{67}Ga と同程度の膿瘍への集積をみとめた、一方 97 席では人体での炎症巣描出の実例を提示し、また好中球回転の観察にも充分応用し得ることを明らかにした。94, 95 席は ^{111}In -chloride による骨髄シンチグラムの問題で、

94 席では $^{99\text{m}}\text{Tc}$ コロイドによる場合とを定量的に比較し症例によっては両者に相異のあることを示し、95 席は骨髄の広がり和其他の造血能検査値との関係を調べた。96 席は ^{51}Cr 赤血球寿命の解析を ^{51}Cr 溶出率を補正した真の寿命を算出すべく電算機を用い行った。98 席は ^{111}In 標識血小板で回転と血栓描出を行い、この方面への応用の糸口を示し、99 席は ^{111}In 標識リンパ球の回転を観察し、比較的不明であったこの分野の知見を一步進めた。

(刈米重夫)

H. 内分泌 (甲状腺以外)

(100-101)

本セッションでは副腎シンチグラフィと CT スキャンに関する二つの発表が行われた。100 席の東大(放)の石丸らは原発性アルドステロン症、クッシング症候群、褐色細胞腫等について両検査法を比較し、手術を施行した7例すべて副腎シンチでは異常を認めたが、CT スキャンでは腫瘍の大きさが長径 2.9 cm では発見可能だが、2.2 cm 程度では明らかな意味づけは困難であると報告した。101 席の京大(放核)の福永らも両手技の有用性を

認めながらも、褐色細胞腫で特に副腎外に発生したものは CT スキャン、異所性 ACTH 産生腫瘍の副腎皮質過形成の診断には副腎シンチが有用であると報告した。これに対し、副腎シンチは機能面を反映し得ることから、CT より有用であると指摘した森(神戸中央市民)のコメントが印象的であった。これらの発表を通じて各疾患の特殊性を加味した副腎シンチと CT スキャン適応に関するさらに詳細な検討が必要であると考えられた。

(小林 功)

I. 甲状腺・副甲状腺

(102-104)

演題 102 では free T_4 (Gamma Coat) 測定法の有用性が報告されたが、基礎的検討、臨床的評価の面に若干の問題があり討議がなされた。このような方法の評価を含め甲状腺機能検査法の再評価が必要な時期にきていると思われ、その体制の設立が望まれる。

演題 103 は、抗甲状腺抗体ことに膜抗体を標識して癌ことに転移部のイメージングを行なおうとする新らしい試みである。現時点ではかなりの精製過程を経ながらなお臓器特異性が確立されないとの成績であったが、その将来の発展には大きな期待が寄せられる。

演題 104 は、TSH-RIA 高感度法の感度上昇に関する

血清量増加のぜひの検討である。演者らは本邦で始めて $0.156 \mu\text{U/ml}$ の TSH を検出できる高感度法を開発し、正常と低値の明瞭な識別が可能と既報しているが、血清を $200 \mu\text{l}$ にすると非特異的結合阻害性が増強されることを詳細に検討した。また、各種キャリアーの比較からバセドウ血清が最良であり、プールしない方が良いことを示した。

(森 徹)

(105-108)

最初の2題は TBG RIA KIT (コーニング社)の基礎的、臨床的検討に関するもので、TBG が容易、正確に計測し得る利点が紹介された。これに対し長滝(東大、内)は T_4/TBG 比と FT_4I , FT_4 値は良く相関するというのは特に TBG 減少症の時にはその比は透析法より高くなるはずで相関するというのは納得がいかないと述べ、森(神戸市民、内)は、従来の生物学的測定が RIA による測定より優れている点があることを指摘した。後の2題は Thyroglobulin 値の診断的利用価値の評価で討論が行なわれたが、一致したが、山下(長崎大)が転移のない分化型甲状腺癌8例で全例正常範囲を示し、腺腫は高値を示し鑑別可能な利点を述べたのに対し、池窪(京大)は、分化型甲状腺癌では高値を示すと述べた。山下はこれに対し、甲状腺癌の大部分が乳嘴状腺癌であったために正常範囲を示したのかも知れないと答えた。この2テーマはいずれも臨床的に興味のある問題であったが、前者は T_4/TBG 比の TBG 減少症の際の再検討、後者は甲状腺癌と腺腫が Thyroglobulin 値測定により明確に鑑別し得るのかの再検討にそれぞれ問題が残された。

(木下文雄)

(109-112)

109, In Vitro 甲状腺機能検査キットについての各検査施設についての精度管理に関する検討結果として、

T_4 , T_3 , T_3 up take の測定に関しては全体として向上がみられたが、TSH についてはまだ問題があり、キット自体を含めてなお検討の要ありとのことであった。110, 112は可溶性レセプターを用いる TSH の radio receptor assay, と、Radioimmunoprecipitation 法による抗 TSH 受容体の検出についてであったが、これらはルーチン検査というより、前者については自己免疫性甲状腺疾患の病因等の解析について、また後者はバセドウ病の病態解析に有効であるとの報告であった。111 固定化抗体サンドイッチ用による TSH 測定キット Immophase についての検討を行った結果、簡便であり、今後の有用性に期待がもてるということであった。

(土屋武彦)

(113-116)

担当の演題は相互にまったく関連していないので1題ごとにまとめる。113 は独自に開発したヒトカルチニンのラジオイムノアッセイに関する報告で十分に日常の検査法として使用でき、特に甲状腺髄様癌の発見に有用であることを示した。114 の副甲状腺腫瘍の局在診断にタリウムシンチグラフィが有用であることの発表に対しては、同様の経験を持つ施設から追加があり、有用性と同時にその限界などに関して活発に討論された。115 の ^{125}I -Protein A を用いる thyroid plasma membrane binding IgG (TPMBI) の検出法に関しては、この活性がマイクロゾーム抗体価と相関するが、LATS との相関は有意ではないが Free T_4 Index と相関することが示され、バセドウ病の病因としての意義などについて討議された。最後の T_3 抗体を用いた摂取率測定法は血中濃度によって変化するという報告は、日常臨床における大きな問題として活発な討論があり、さらに今後も取り上げて行くべき問題であると考えられた。

(長滝重信)

J. 脳・中枢神経系

(117-119)

演題 117 は Microsphere 法による血流測定を、馬尾神経領域に適用したものである。整形外科的疾患の病態

解明に役立てたいという基本構想による研究だが、これがうまく臨床面に連絡していくことを祈りたい。

演題 118, 119 は、頭蓋内の髄液循環の病態を解こうと